

「好まれる言い回し」とドイツ語教育  
——モノ、コト、トコロの把握に見る「ドイツ語らしさ」——

大藪正彦

## 1. はじめに

日本語母語話者としてドイツ語に接していると、直訳的な日本語・ドイツ語がしばしば奇妙な印象を与えることに気づく。本稿との関連で言えば次のような場合である（例文の訳は筆者による）。

- (1) Den alten Heilandt stimmte Schugger Leos Anblick heiter. (G. Grass, *Die Blechtrommel*)  
→ 年老いたハイラントをシュガー・レオの眺めが快活にした。
- (2) Die Küche hatte kein Fenster. (B. Schlink, *Der Vorleser*)  
→ 台所は窓を持っていなかった。
- (3) ねえワタナベ君、私のこと好き？ (村上春樹「ノルウェイの森」)  
→ *Liebst du mein[e] koto/Sache/Angelegenheit?*
- (4) 天皇陛下には [...] 次のようにお気持ちをお示しになりました。(宮内庁 HP)  
→ *Im Kaiser kam es zum Zeigen des Gefühls.*

語学教育における「文法」は、従来、ある表現が正しいか、正しくないかということを中心に問題としてきた。しかしながら、実際の授業で出会う問題には様々なレベルのものが存在する。上例が示すような、「文法的に間違いではないけれど…」という状況に出会うことも決して稀ではない。このような状況において、直感的により自然な、より好んで用いられる表現<sup>1</sup>が日独それぞれの言語にあるように感じられるとするならば、それらを体系的に捉えようとする努力が当然教師側に期待されてよい。

本稿では、まず日本語と対比した場合のドイツ語・印欧語の全体的特徴について先行研究でどのような言及がなされているかを概観し、その後事例研究としてドイツ語・日本語におけるモノ、コト、トコロの把握のされ方を事例に基づいて検証する。文法項目としては、動詞句の名詞化、場所副詞句の主語化などが観察の対象となる。複数の項目を横断する形で同じ傾向性が確認できるとすれば、それはドイツ語（日本語）を有意義に特徴づけている基本的な要因であると考えられるであろう。

## 2. 好まれる言い回し

日本語と対比したドイツ語・印欧語の全体的特徴については、よく知られたいくつかの先行研究がある。佐久間 (1941) は、日本語では物事が「おのづから然る」ように表現する

<sup>1</sup> 「好まれる言い回し」という表現は池上嘉彦氏の一連の論考に拠っている。例えば次の引用を参照。「どの言語にも、〈好まれる言い廻し〉と呼べそうなものがあるように思われる。ここで言う〈好まれる言い廻し〉とは、具体的な個々の成句、熟語のことではなく、出来事が言語で表現される際にその言語の話し手によって好んで採られる表現の構成の仕方——認知言語学的な言い方をすると、構文のスキーマ——とでも言ったようなものである」（池上 1999: 84）。

傾向があるのに対し、英語などの印欧語では「何者かゞしかする」ように表現する傾向があると述べた。池上 (1981) による「<する> 的な言語」と「<なる> 的な言語」という分類はよく知られているところであろう。以上は、ある出来事を「行為」として捉える傾向にあるか、「推移」として捉える傾向にあるかという観点からの特徴づけである。

一方で、「行為」対「感覚」という図式でまとめることのできそうな一連の議論がある。よく知られているものとして Hartmann (1952) を挙げることができるだろう。

[日本語では] 個々の過程は分析されるのではなく、ただ知覚され、確認されるだけである。その際、出来事が何に由来するかということは重要でなく、出来事はそれ自体が体験された内容のままに保たれる。印欧語は、往々にしてただ推測されるだけに過ぎない因果関係であっても、動作主やある原因によって引き起こされたという特定の形式に当てはめてしまう。(Hartmann 1952: 31, 訳は筆者)

Ikegami (2002) では、同様の傾向が「動作主指向的」(agent-oriented) 対「感覚者指向的」(sentient-oriented) という対立で捉えられている。

ところで、「行為」対「推移」並びに「行為」対「感覚」という二組の図式に出てくる「推移」、「感覚」という概念は、それぞれにまったく独立した個別のものというわけではなく、一連の現象を異なった観点から述べているものであると考えることができる。感覚というのは、外部からの刺激を感覚器官で受容する内心的 (zentripetal) な営みであり、本来的に制御不能という性質を有する。つまり、感覚者の立場に立った場合、出来事は自ずから生起し、推移し、そして阻止できないものとして捉えられることになる。一方、行為という営みは、本来外部からの刺激に適切に反応するという遠心的 (zentrifugal) な性質のものである。感覚と対比した場合、一般に制御可能な能動的な営みとして特徴づけられる (Ozono 2003 を参照)。両者の図式の適用の相違ということで簡単な例を一つだけ挙げておく。

- (5) a. 受付の女性が「もう少しで見えますから」と僕に声をかけた。(村上「ノルウェイ…」)  
b. Die Empfangsdame teilte mir mit, Ishida-sensei komme gleich. (U. Gräfe 訳)

同一の事態を表現するのに、日本語では本来感覚を表す「見エル」という動詞が、ドイツ語では移動を表す *kommen* という動詞が用いられている。なお、言うまでもなく、以上のような特徴は相対的な「傾向性」としてしか議論できない性質のものである。

### 3. モノ、コト、トコロ

以上の議論を踏まえた上で、以下では具体的な事例を見ていきたい。取り上げてみたいのは、モノ、コト、トコロの把握に関する日本語・ドイツ語間の相違である。「行為の図式」においては行為者 (個体=モノ) の析出が前提とされることを踏まえると、この図式を好む言語ではモノ指向的な特徴が認められるのではないかと、一方、「感覚・推移の図式」においては、能動的な行為者は背景に退き、事態は状況全体の推移として捉えられるわけであるから、この図式を好む言語では逆にコト・トコロ指向的な特徴が認められるのではない

かということが予想される<sup>2</sup>。

ではここでモノ、コト、トコロという概念について確認しておきたい。特にモノとコトの相違が問題となると思われるが、端的に表現するならば、モノは「空間」的な存在、一方コトは「時間」的な存在である<sup>3</sup>。ただし、これらは我々の認知的な営みに関係したカテゴリである点に注意しておく必要がある。つまり、現実界の存在の中にはモノとして捉えられやすい対象、コトとして捉えられやすい状況もあると考えられるが、そのような存在も決して客観的な存在ではなく、我々の認知過程を経て意味づけされた主観的な存在だということである。そして、言語的にはモノとして捉えられた存在は名詞（句）として、コトとして捉えられた存在は動詞（句）として実現される（実際には「名詞らしさ」(nounness)や「動詞らしさ」(verbness)の度合いも問題となるであろうが、本稿の目的との関連ではこのように単純化した形で考えておいて差し支えないと考える)。例えば、動詞 *tanzen* は、経過する時間の中での過程を概念化しているのに対し、名詞である *Tanz* は、時間の流れとは無関係に、踊る様をモノとして概念化している<sup>4</sup>。このような議論自体は別に目新しいものではなく、次の引用に見るように、従来の文法記述の枠組みにおいても指摘されてきたものである。

それら [=動詞, 名詞, 形容詞・副詞] は (客観世界の) 現象を精神的・言語的に捉え、分析し、分類的に理解する (刻印づけする) 形式である。名詞は指示対象を物として、形容詞は属性として、動詞は動作として描写する。その際、対象自体は実際に「物」、「属性」、「動作」である必要はない。[...] ある種の事柄が特定の品詞によって優先的に取り上げられるということはあるにせよ、客観的現象と品詞の間には「自然に与えられた」、「事柄から強えられる」ような対応関係は存在しない。(Erben 1980: 59, 訳は筆者)<sup>5</sup>

トコロについては、場所副詞（句）がこれを言語化すると考えておく。これは意味的な基準を含むものであるが、場所を尋ねる „wo“ や「ドコ」などで疑問の対象となるものがトコロである<sup>6</sup>。

<sup>2</sup> 行為ももちろんトコロを前提とするものであるが、言語的にその実現はしばしば任意的である。これは、自ら意思を持って行為するヒトという認知的な際立ち (cognitive saliency) の極めて高い存在に対して、その行為の行われるトコロは相対的に低い際立ちしか有さないためであると考えられる。一方、コトとトコロに関しては、前者が時間的存在で抽象的であるのに対し、後者は空間的存在で具体的であるということから、トコロの方が相対的により高い際立ちを有するという可能性が生じる。

<sup>3</sup> 本稿ではモノ、コトという日本語の区分に基づく術語を採用したが、Lyons (1983: 71f.) はそれぞれを「一次的項」(Entitäten erster Ordnung)、「二次的項」(Entitäten zweiter Ordnung)と呼んでいる。

<sup>4</sup> 両者は、近年の認知言語学において「順次的スキヤニング」(sequential scanning)と「総括的スキヤニング」(summary scanning)と呼ばれている認知処理との関連で捉えることもできる。我々は、時間軸において生起する事態を捉える際に二つの異なるやり方で対処しているというもので、一つは、時間の流れに沿って刻々と変化していく事態を「順次的に」捉えるというやり方、もう一つは、事態を完結した一つのまとまりとして、いわば「総括的」に捉えるというやり方である。

<sup>5</sup> 例として Erben は *Fieber, fieb[e]rig, fiebern* を挙げている。また、特定の品詞が優先的に対応するという点について、彼は色彩に関する現象と輝きに関する現象を指摘している。前者には形容詞が、後者には動詞が専ら対応するというものである。例えば、*Die Dinge sind rot, blau weiß; Die Dinge \*roten, weißen*, ただし空や山について稀に *blauen; Die Dinge glänzen, leuchten, funkeln; ... sind blank, licht* は稀; むしろ ... *sind glänzen-d, leuchten-d* など。

<sup>6</sup> モノ、コト、トコロの関係については Ozono (2004) を参照。なお、モノとトコロに関して補足しておく、両者は空間的存在で具体的という点では同じであるが、有界性というレベルにおいて対立する。原則として相対的に有界的な対象がモノ、無界的な対象がトコロとして把握される (池上 1998)。

#### 4. モトとコト

##### 4.1 モノの把握——コトのモノ化

まず一般に「名詞化」(Nominalisierung) と呼ばれる項目を取り上げてみたい。

- (6) a. Wir reisen, weil wir uns nach Neuem sehnen.  
b. Wir reisen aus Sehnsucht nach Neuem. — 教科書 *Gegensätze Neu* より

名詞化の重要な働きの一つがモノとしての「実体化」(Hypostasierung) ——本来モノでない「行為」や「属性」をモノ化して提示すること——にあることを踏まえるならば、上例の a-文でコト的に表現されている内容が、b-文ではモノ的に表現されていると考えることができる。ドイツ語の名詞化は一般に学術的なテキストなどに特徴的であるとされるが、実際には日常的にも多用される傾向にある (Ickler 1997: 105ff.)。一方、b-タイプの表現は日本語に直訳するとしばしば奇妙な印象を与える (上例 (1) も参照)。ドイツ語の名詞化された語句に自然に対応するのは、日本語では多くの場合動詞を用いたコト的な表現である。

- (7) a. Den alten Heilandt stimmte Schugger Leos Anblick heiter. (Grass, *Blechtrommel*) (= 1)  
b. ハイラント老人はシュガー・レオの姿をみて, 快活になった。(高本研一訳)  
(8) a. 僕が眠っているのを見ていてほしいんだ。(村上「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)  
b. Ich möchte gerne, daß du meinen Schlaf bewachst. (A. Ortmanns/J. Stalph 訳)

##### 4.2 コトの把握——モノのコト化

「名詞化」は日本語学習においても重要な文法項目であるが、実はドイツ語学習で取り上げられるものとは内容が異なる。それは動詞のあとに形式名詞としての「コト」や「ノ」を付加するというもので、その際品詞の転換は生じない。従ってコト的な把握の仕方は保持されたままである。機能的にはドイツ語の zu 不定詞句や daß 文に相当する<sup>7</sup>。

- (9) a. 毎日漢字を練習すること / のが大切だ<sup>8</sup>.  
b. Es ist wichtig, jeden Tag Kanji zu üben. — 教科書 *Grundkenntnisse Japanisch* より

日本語ではコトからモノを取り出して前面に押し出すのは一般的でない——つまりコトがコトのまま保持される傾向が強い——とされるが (池上 1981: 256ff.)、日本語におけるコト指向的な傾向の強さは特に次のような例に顕著に見て取れる。

<sup>7</sup> Ullmer-Ehrich (1977) は次のように「名詞化」の二つのタイプを区分している。これに従うと、一般に日本語文法で取り上げられるのは前者の „Nominalisierung“ タイプ、ドイツ語文法で取り上げられるのは後者の „Substantivierung“ タイプであるということになる。

i. Peter hat angekündigt, daß er abfährt. (Nominalisierung)  
ii. Peter hat seine Abfahrt angekündigt. (Substantivierung)

<sup>8</sup> 同様の内容を「毎日の漢字の練習が大切だ」のように表現したとすれば、「練習」という行為が名詞としてモノ的に捉えられていることになる。

- (10) a. [...] しっかり目覚ましをかけておいたのがジリジリうるさいなあ……と手を伸ばしたらそれは電話だった。(吉本ばなな「満月——キッチン2」)
- b. Ich hatte vorsichtshalber den Wecker gestellt, und als mich plötzlich ein lautes Klingeln aus dem Schlaf riß und ich nach dem blöden Ding greifen wollte, merkte ich, daß es das Telefon war. (W. E. Schlecht 訳)

a-文において、「ジリジリうるさい」のは、もちろん「目覚まし」であって、「目覚ましをかけておいた」のが「うるさい」というのは、ドイツ語の話し手にとっては奇妙に感じられるであろう<sup>9</sup>。ドイツ語訳の b-文では、この部分は全く異なる構文によって処理されている（しかも *Klingeln* という無生物を主語とした行為表現が用いられている点が興味深い。2 節における Hartmann の引用も参照）。そして最終的に、日本語においては、モノのコト化と呼ぶことができそうな、次のような表現形式が定着している。

- (11) a. ねえワタナベ君、私のこと好き? (村上「ノルウェイ…」)(=3)
- b. Sag mal, Töru, liebst du mich? (Gräfe 訳)

ここでは名詞の「動詞化」が生じているわけではないが、形式名としての「コト」が付加されることによって、個体としての対象の輪郭がぼかされ、当たりが柔らかくなるという効果が生じている。コトの持つ無界的な特徴が重ねられた状況であると言えよう。

## 5. モノとトコロ

### 5.1 モノの把握——トコロのモノ化

次の b-文は Lyons (1983) が場所主語 (Lokativ-Subjekt) として論じている例である。

- (12) a. Es ist kalt in London.
- b. London ist kalt. — Lyons (1983: 101)

場所副詞句がモノ化され主語となる——ここではいわゆる「主語交替」(Subjektvertauschung) に該当する——事例であるが (Ozono 1999 を参照)、ドイツ語ではさらに、日本語話者にとって奇妙に感じられる次のような構文も許容される。

- (13) Der ganze Schrank hängt voller Kleider. (U. Johnson, *Das dritte Buch über Achim*)<sup>10</sup>
- (14) Der Haupteingang lag voller angewechter Blätter [...] (*Mannheimer Morgen* 22.8.1989)
- (15) Der Platz hallt wider vom Techno-Sound der neuen Zeit. (*Frankfurter Rundschau* 3.4.1999)

<sup>9</sup> これは言語類型論の分野で「主要部内在型関係節」(internally-headed relative clause) と呼ばれるタイプの構文である。例えば野村 (2001) を参照。類例としては、「財布の中身を確認すると [...] 千円札が 2 枚はいっていたのがなくなっていた」、「ひろしは [...] 外国の子が迷子になっているのを助けて友だちになります」など (いずれもインターネットからとった実例)。

<sup>10</sup> 邦訳は「洋服箆箆いっぱいぎっしり服がかかっている」(藤本淳雄訳)。

この関連で「持つ」(所有)と「アル・イル」(存在)の対応も取り上げることができよう。

- (16) a. Die Küche hatte kein Fenster. (Schlink, *Der Vorleser*) (= 2)  
b. 台所には窓がなくて [...] (松永美穂訳)

以上の例は、日本語ではトコロとして言語化される(されなければならない)項が、ドイツ語では主語として——例えば(16a)では「所有者」(モノ)に擬して——言語化され得ることを示している。次のような親族関係の表現もこれと平行している。

- (17) a. 殺さないでください。高校生の娘が二人いるんです。(村上「世界の終りと…」)  
b. Bringen Sie mich nicht um, bitte! Ich habe zwei Töchter, beide auf dem Gymnasium, in der Oberstufe. (Ortmanns/Stalph 訳)

## 5.2 トコロの把握——モノのトコロ化

日本語では、ある個体に言及する代わりに、その個体が存在している場所に言及するということが行われる。次のような場合である。

- (18) a. いったいここはどこなんだ? (村上「ノルウェイ…」)  
b. Wo war ich nur? (Gräfe 訳)

あるいは、個体自体がトコロ的に捉えられる場合もある。

- (19) a. 「殺さないでください。高校生の娘が二人いるんです」  
「ふうん」と私は言った。「どこの高校?」(村上「世界の終りと…」)  
b. [...] „Soso“, sagte ich. „Welches Gymnasium?“ (Ortmanns/Stalph 訳)  
(20) a. Was fesselt dich denn gerade an ihm besonders? (H. Hesse, *Unterm Rad*)  
b. 彼のどこにおまえは特にひきつけられているのだい? (高橋健二訳)

さらに、日本語の敬語表現における次のような例も興味深い。

- (21) 天皇陛下には [...] 次のようにお気持ちをお示しになりました。(宮内庁 HP) (= 4)

ここでは、行為者であるはずの主体がトコロ化され(「ドチラ様」、「ドナタ」、「ドナタ様」のような言い方も参照)、行為という営みがそこで生起する自発的な出来事であるかのように表現されている。次に見る通り、ドイツ語では通常の行為表現が対応する。

- (22) a. 王様におかせられましたは [...] お引きこもりになりましたきり、いたくご機嫌わるう。(「ハムレット」福田恒存訳)  
b. Der König [...] hat sich auf sein Zimmer begeben und ist sehr übel. (A. W. von Schlegel 訳)

## 6. ドイツ語教育における文法の再考——結びに代えて

以上、本稿ではモノ、コト、トコロの把握に関する事例研究に基づいて、「好まれる言い回し」という問題について見てきた。全体の議論を通じて確認してきたのは、日本語・ドイツ語の両言語において、複数の領域を横断する形で同じ傾向性が認められるということである。具体的には、ドイツ語のモノ指向性、日本語のコト・トコロ指向性ということであるが、初めに見た通り、その背後には、より一般的で、抽象的な言語化の型のようなものを想定することも十分可能であるように思われる。ただし、この点については今後更に精密な議論を重ねる必要がある。

本稿で議論したような「好まれる言い回し」という問題は、決して中級以上の問題ではない。「持つ」と「アル・イル」の対立などはごく初期の段階から、例えば「弟ガイル」/ „Ich habe einen Bruder“ のような表現との関連で問題となる。「空腹ガ空イタ」/ „Ich habe Hunger“ という対応は、初学者には少なからず新奇な印象を与えるものであろう。そのような印象が何に起因するのかと問われれば、「空腹」という事態をモノとして言語化するという——コトとしての言語化を好む日本語話者にとっては馴染みの薄い——捉え方ということになる。次の例は日本語のトコロ指向的な傾向を反映したものであるが、同じく基本的な表現である。

- (23) a. ドイツの首都はどこですか。  
b. Wie heißt die Hauptstadt Deutschlands?<sup>11</sup>
- (24) a. どこの会社で働いていますか。  
b. Bei welcher Firma arbeiten Sie?

本稿でとりわけ強調したかったのは、このような表現は——類例の存在がそれを暗示するように——「そうになっているから、そうになっているのだ」という形の説明を超えて、一般的な原則の存在を提示できる十分な可能性を孕んでいるということである。

この「説明」に関わる部分を実際の授業でどのように、どの程度提示するかはまた別の問題であるが、一方で、狭義の文法を教えるだけではやはり不十分であろう。例えば、一般的な教科書に記述されている文法規則のみから、日本人学習者が次のような表現の発想に至るのはかなり難しいのではないだろうか。

- (25) a. 今日のおすすめは何ですか。  
b. Was empfehlen Sie heute?
- (26) a. 駅はどこですか。  
b. Wie komme ich zum Bahnhof?

これらもまた、ドイツ語では行為者の析出を伴う「行為の図式」に基づく言語化が相対的に優勢であることを示す例である。ドイツ語教育との関連で言えば、これまで見てきたような母語話者の実際の言語運用——そしてそれを背後で支えているはずの言語的直感

---

<sup>11</sup> ドイツ語で wo を使うと文字通り首都の「場所」を尋ねていることになる。

——を視野に入れた文法の授業が提供できれば、単に構造レベルにとどまる授業より、学習者にとって遥かに実り多いものとなるはずである。

付記：本稿は第 53 回日本独文学会中国四国支部研究発表会（広島大学，2004 年 11 月 6 日）におけるシンポジウム「ドイツ語教育における文法の再考——ドイツ語学からのアプローチ」での報告に基づいている。

## 文献

- Erben, Johannes (1980): *Deutsche Grammatik. Ein Abriß*. 12. Aufl. Ismaning: Hueber.
- Hartmann, Peter (1952): *Einige Grundzüge des japanischen Sprachbaues*. Heidelberg: Winter.
- Iekler, Theodor (1997): *Die Disziplinierung der Sprache. Fachsprachen in unserer Zeit*. Tübingen: Narr.
- 池上嘉彦 (1981): 『<する> と <なる> の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦 (1998): 「<モノ> と <トコロ>——その対立と反転」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院, 864-887.
- 池上嘉彦 (1999): 「日本語らしさの中の <主観性>」『言語』1 月号, 84-94.
- Ikegami, Yoshihiko (2002): The Agent and the Sentient. Asymmetry in Linguistic Coding. In: Ezawa, Kennosuke u.a. (Hg.): *Linguistik jenseits des Strukturalismus*. Tübingen: Narr, 333-348.
- Lyons, John (1983 [1977]): *Semantik*. Bd. 2. München: Beck [Englisches Original 1977].
- 野村益寛 (2001): 「参照点構文としての主要部内在型関係節構文」山梨正明ほか (編)『認知言語学論考 No. 1』ひつじ書房, 229-255.
- Ozono, Masahiko (1999): Zur Lokativ-Subjekt-Konstruktion. In: *Dokumentation des 27. Linguisten-Seminars der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 1999*, 73-83.
- Ozono, Masahiko (2003): Sensationsschema und Aktionsschema – aus kontrastiver Sicht. In: *Neue Beiträge zur Germanistik 2* (1), 68-79.
- Ozono, Masahiko (2004): *Mono, koto* und *tokoro*. Über die bevorzugte Auffassungsweise des Deutschen und Japanischen. In: *Veröffentlichungen des Japanisch-Deutschen Zentrums Berlin* 51, 23-31.
- 佐久間鼎 (1995 [1941]): 『日本語の特質』くろしお出版 [育英書院].
- Ullmer-Ehrich, Veronika (1977): *Zur Syntax und Semantik von Substantivierungen im Deutschen*. Kronberg/Ts.: Scriptor-Verlag.



(Abstract)

**„Bevorzugte Ausdrucksweise“ und der DaF-Unterricht  
Die typische Auffassungsweise von Ding und Ort im Deutschen**

Masahiko OZONO

Wenn man sich als Muttersprachler des Japanischen mit der deutschen Sprache befaßt, kommt man immer wieder zu den Fällen, bei denen eine direkte, wortgetreue Übersetzung aus dem Deutschen bzw. Japanischen in die andere Sprache einen merkwürdigen Eindruck erweckt. Die Unterschiedlichkeit beruht in manchen Fällen auf dem Unterschied der Art und Weise, wie der Sprecher den zu kodierenden Sachverhalt auffaßt. Dabei handelt es sich nicht um die Grammatikalität, sondern um die Üblichkeit des sprachlichen Verhaltens oder die Präferenz der Sprecher für bestimmte Ausdrucksweisen, die wiederum Einfluß auf die Grammatik ausüben mag.

Im vorliegenden Aufsatz wird mittels einer Fallstudie mit authentischen Daten darauf eingegangen, wie die drei Entitäten, nämlich *mono* (Entität erster Ordnung), *koto* (Entität zweiter Ordnung) und *tokoro* (Ort) im Deutschen und Japanischen aufgefaßt und kodiert werden. In Betracht kommen z.B. die Nominalisierung der verbalen Phrase oder die Subjektivierung des lokalen Adverbs. Es wird gezeigt, daß beim Auffassen eines Sachverhalts das Deutsche zu *mono*, das Japanische zu *koto* und *tokoro* tendiert. Und weil diese Tendenz auf verschiedene grammatische Bereiche übergreift, ist sie als ein grundlegendes Moment zu betrachten, das die jeweilige Sprache in sinnvoller Weise prägt.

Es erscheint mir unzweifelhaft, daß der DaF-Unterricht viel fruchtbarer wird, wenn man dort nicht lediglich auf der strukturellen Ebene bleibt, sondern darüber hinaus auf die unterschiedliche Performanz der Muttersprachler Rücksicht nimmt.